

量した。また半割したもう一方の検体は、迅速に凍結後、avidin-biotin affinity 法による免疫組織染色を行い、サイトカインの局在をみた。結果：培養上清中の IL-1, IL-6, GM, CSF は乾癬皮疹部に比べ無疹部で増加, TGF- α は逆に無疹部に比べ皮疹部で増加していた。以上より, IL-1, IL-6, GM-CSF は乾癬の病巣形成の初期に作用し, 速やかに down-regulate されること, TGF- α は皮疹形成後の維持に作用することが考えられた。

8. *Mycoplasma pneumoniae* 感染症における DNA プローブ法の検討

(小児科)

江波戸景子・横田 和子・伊藤知賀子・
安部 美希・石井のぞみ・近藤 恵里・
崔 信明・坂内 優子・関 千夏・
中野 育子

(ラジオアッセイ科)

岩近千津子・出村 黎子

(微生物学免疫学)

内山 竹彦・荒明美奈子

Mycoplasma pneumoniae (以下 *M. pn*) 感染症における DNA プローブ法について検討した。咳嗽, 発熱等の臨床症状, 血液検査, 胸部レントゲン所見から *M. pn* 感染症と考えた33例について, Genprobe 社開発の肺炎マイコプラズマ DNA プローブ「中外」を用いて, *M. pn* の rRNA を検出した。DNA プローブ法は陰性コントロール比3.0以上を陽性と判定した。33例中, 陽性24例, 陰性9例であった。陽性例と陰性例では, 重症度, 血液検査所見, 検体採取病日等に有意差を認めなかった。検体採取以前に, 有効抗生剤を投与されていた11例では陽性率は50%であったが, 有効抗生剤非投与例では80%であった。DNA プローブ法は, CF, PHA 等の血清抗体価が上昇する以前にも, 陽性となることから, 早期診断に有用と思われる。しかし, 有効抗生剤投与により陽性率が低下することから, 血清診断との併用によって, 確定診断を行う一方で, 早期治療を有効に行うことが可能となるとと思われる。

9. Complete association with HLA-DR4 and insulin-processing to stimulate proliferation of autologous T cells in the insulin autoimmune syndrome

(糖尿病センター)

内瀉 安子・平田 幸正・大森 安恵

昨年の本談話会で発表したように, インスリン自己

免疫症候群 (IAS) 患者は調べた限り全員が HLA-DR4 を保持していた。その後日本人30名, さらに韓国人2名, 台湾人1名の IAS 患者を調べたが, すべて HLA-DR4 をもっていた。これらの DR4 を DNA タイピングしてみたところ, すべて DRB1*0406 であり, DQ は日本人においてこれと連鎖不平衡を示す DQA1*0301/DQB1*0302 であった。すなわち, IAS 患者すべてが DRB1*0406/DQA1*0301/DQB1*0302 をもつことがわかった。そのうちの7名について, autologous MLR 試験を試みた。Antigen-presenting cell に 40 μ M のインスリンを18h exposure した後, 同一患者の T cells を加え6 days incubate した。最後の18h に加えた³H-thymidine uptake はインスリン非存在下やグルカゴン添加時に比べ10-20倍となった。HLADRB1*0406/DQA1*0301/DQB1*0302由来の分子がインスリンの提示と認識の際, 有意な拘束性を示すことがわかった。

10. IgA 腎症における ICAM-1 の発現について

(第四内科)

浅野美和子・湯村 和子・大図 弘之・
内田 啓子・川嶋 朗・新田 孝作・
二瓶 宏

糸球体腎炎の発症進展を考える上で, 糸球体の主要な構成細胞である血管内皮細胞-白血球等の相互作用の関与は重要と思われる。特に炎症増強時, リンパ球, 白血球浸潤に重要な役割を持つと考えられる接着分子 ICAM-1 (intercellular adhesion molecule-1) の腎組織内での発現を検討した。ICAM-1 に対するモノクローナル抗体を用い, 正常コントロール4例, ループス腎炎9例, IgA 腎症10例, 微少変化群6例, 膜性腎症6例を蛍光抗体間接法により染色した。正常コントロール群では, ほぼ全例で ICAM-1 が染色された。陽性所見は, 糸球体係蹄壁, 尿細管周囲の毛細血管, メサンジウム領域に認められ, IgA 腎症では, 尿蛋白が多い症例, 組織障害が強い症例で強く染色される傾向を認めた。今後, 腎生検で得られた新鮮凍結切片を利用し, PCR 法 (polymerase chain reaction) によって ICAM-1 の確認, その他これらの調節因子とされるサイトカインの関与を検討する予定である。

11. RT-PCR 法によるヒト T 細胞抗原レセプター V β の解析

(微生物学免疫学)

加藤 秀人・八木 淳二・
今西 健一・内山 竹彦